

## ほらふき男爵芋ノススメ

杉 谷 隆

人気映画“Back to the Future Ⅲ”の舞台は、1885年の西部開拓村。タイムマシンで過去へいった主人公が、赤ん坊の曾祖父を抱きあげて「アメリカで初めて生まれたマクフライ家の人間だ」と感激する場面がある。学生諸君は、ここでピンとくるものがないだろうか？

頭に“Mac”がつく人名といえば、そう、彼らはアイルランド移民なのだ。では、なぜ移民したのか？

答えは「ジャガイモの凶作」。1500～1900年ころは小氷期で寒く、1789年にはコムギの凶作があるフランス革命を誘っている。1840年代はむしろ温暖だったが、かえってアイルランドでは主食のジャガイモに疫病が蔓延し、大量の難民がアメリカへなだれこんだのである。1620年のPilgrim Fathersも、真相はどうだったのか。

映画では、主人公がインディアンに追われる場面もある。これと童話の『三匹の子ぶた』との共通点は何か？

その発端は、8000年前に中近東でコムギが栽培化されたことにある。畑作のコムギは有畜農業に体系化されて、ヒプシサーマル期のメソポタミア文明やエジプト文明を支え、さらにヨーロッパのナラの森を乱伐しながら拡大していった。ヨーロッパ文明は、ギリシャ文明のように森を食いつくした末に、寒さにふるえながら中世の暗黒のままに滅亡したかもしれない。

それを救ったのが植民地である。ヨーロッパ文明は、植民地に難民を遺棄すると同時に、そこから上納されたパンで生き延びたのである。だがそこには、つい数万年ほど無沙汰をしていた親戚が、先に住み着いていたのだ（注）。

この地中海農耕の伝播の渦中で、まずヨーロッパの森ではオオカミが、そして北米の森や草原ではインディアンが、それぞれ生息地を追われ、ともに「凶悪犯」の汚名を着せられて殺されたのである。これが答えだ。伝染病に倒れた者も多い。ピアスの『悪魔の辞典』によれば、彼らは「新大

陸の肥料」とされた。強奪した広大な土地で収奪的農業を行えば、収益はいやでも上がる。

オーストラリアも北海道もこの轍を踏んだ。われわれの朝の食卓にパンやハムエッグが発見されるのも、おなじ線上にある。地中海農耕は保存食品の世界なので、めんどろな芋粥よりパンに主婦の軍配が上がったのである。

この伝播は、いまアマゾンのインディオやカボクロを直撃している。環境保護活動家のルーゼンベルガーは、彼らを森から追い立てるために、開発派がゴムの木を枯らししていると糾弾する。これは、インディアンを兵糧攻めにするために、バッファローを乱獲したこととまったく重複する。殺人、伝染病、難民遺棄罪も再犯である。この難民による「焼畑」は、輪作体系も山ノ神信仰もない、ただの「乱伐」にすぎない。

これだけ広大に、かつ血塗られた足跡を残した農耕文化複合はない。しかしそれは、ひとり地中海農耕の専売特許ではない。種子農耕というものがもつ属性といえる。歴史学者の佐原眞によれば、弥生の稲作は日本列島に戦乱をもたらした。植民地で栽培したのがもしもサツマイモだったら、歴史は変わったろう。芋は腐りやすく、貯蔵や輸送が困難だからである。

以上は、私が非常勤で講じている『素人むけ自然地理学』のネタの一部である。近世落語『大工調べ』の焼芋屋には、武蔵野台地の新田開発をみることができる。純真な学生諸君にこんな与太を飛ばして楽しむのも悪趣味だが、あるテーゼは伝えたい。それは「自然と人類は互いの狂言回し」ということだ。風が吹いて桶屋が儲れば、スギの需要も高まって日本林業が復活し、フィリピンの水害も起きなくなる。そういう大ボラ吹きに諸君もなっしてほしいものだ。

注）遺伝子変異の研究から、コーカソイドとモンゴロイドの隔離は6万年前、これらとネグロイドの隔離は12万年前と考えられている。